

編集後記

木簡研究第二四号をお届けする。

本号には、発掘事例報告六二件、論考一本、但馬特別研究会の記録などを収録することができた。多忙な中、原稿を執筆いただいた方々、調査を担当された方々、関係各機関に対し、心よりお礼を申し上げる。

ここ数年間、編集を担当された鎌田元一・清水みき・西山良平委員にかわり、今回初めて編集の責任者となった。奈文研の外から、編集に関わってみて、改めて木簡学会に占める奈文研（事務局）の重要性を実感した。

編集の実情を少し紹介すると、本誌の場合は、たんに調査担当者から送られた原稿をそのまま割り付けて掲載するというのではなく、原稿到着後に、全体の記載統一のための文章表現、釈文の再検討、解釈についての疑義など、執筆者に対してかなり詳しい問い合わせを行なう場合がある。こうしたことは、執筆していただいた方が気分を害する、あるいは礼を失するという恐れもなくはない。しかし、創刊以来、「可能な限り確実な木簡情報の提供」を使命とする本誌の特性から見て、方針を変更するわけにはいかず、繰り返し連絡をとりつつ、理解とお願いをするしかない。そうした手順をへて、毎

年三〇〇頁近い本誌を編集するのは、たやすいことではない。

毎回、編集責任者と、奈文研の編集担当者が決められ、協力して本誌の作成にあたるが、前記のような交渉をはじめ、諸事の連絡は全て奈文研の方をお願いすることになる。今回も馬場基氏の献身的な努力に多くを負っている。氏の丁寧な応対による成果が本誌に生かされているわけである。また、昨年から取り入れられたことであるが、幹事による編集補佐として、鷲森浩幸・岩宮隆司氏にも大いに助けていただいたことを明記しておく。

本誌の彙報にもあるように、平城宮の地下に高速道路を通そうという計画があり、その行方はいまだに予断を許さない。地下水が十分にあって初めて残る木簡にとって、まさに危機的な状況であり、木簡学会としても、早くから反対の立場をとり、運動をすすめてきた。シンポジウム実行委員会への参加、委員会・総会の決議を受けての声明書の草案作成など、渡辺晃宏氏をはじめとする事務局がまさに奮闘している。

そうした様々な木簡学会の活動における奈文研のメンバーの尽力も、昨今はもはや物理的な限界に近づきつつあるように思われる。何とか方策はないものかと思いつつ、十分なサポートをできていないのは何とも申し訳ないことである。

編集体制の問題のみならず、事務局の負担をどう減らすか、ということが差し迫った課題のように思われる。

（寺崎保広）